

# 立ちあげる 非文の説

## 複合動詞論・続

工藤 力 男

### 要旨

コンピュータ操作の場で使われたちまち広がった「立ちあげる」に違和感を抱く人が少なくない。違和感はこの動詞の 自動詞＋他動詞 構造に由来するらしいことは早く指摘されたがその原理は説明されずにきた。筆者は近年の研究に学んで複合動詞全体を検討し 他動詞＋自動詞 構造の複合動詞は多いが 自動詞＋他動詞 構造の複合動詞は特殊な一部に限られることを明らかにした。他＋自 構造の動詞の多くは 自＋他 構造の動詞からの派生で受動態による長い語形を避けて自動詞になったのである。後項が自動詞なら主格だけをとる一価動詞で充分だが他動詞は二価動詞なので「立ちあ

げる」は前後項間で意味がねじれて非文になるのである。

### はじめに

若者のことばづかいや行動を老人が好ましく思うのは普遍的なことである。若年者が革新的で高齢者が保守的なのは当然だからである。言語変化にはそれなりの理由があるので、言語研究を業いとする自分は目くじら立ててそれを非難する気にはなれない。だが、近年の風潮はあまりに凄まじくて寛大に眺めているわけにゆかない。影響力の強いテレビ番組で使われたことばが、その日のうちに全国に伝わり、そのことばの適切さを考えるいとまもなく、

人々が用いるからだろう。

「わたし的には……」千円からお預かりします」などへの批判も見聞きする。食堂で注文をとりきて、「ご注文のほう、よろしかったでしょうか」といきなり言われる。これらは、多くの人がおかしい表現だと感じて自分では使わずに済ませるようだ。それでは「立ちあげる」はどうか。この語を使い始めたのが若者か否かは知らないが、日本語社会に出現してもう十年以上になる。これに対するわたしの違和感は、「わたし的」などのそれとは比べべくもないほど強い。同学に携わる数人からも違和感をきいている。

だが、これについて専門家が本格的に論ずることはなかったようだ。少なくとも、学会誌・紀要・専門書に論考を見いだすことはできなかった。学界で議論が沸かないのも道理かもしれない。日本語文法の研究を専門とする学会の代表が公の席でこれを用いるのを、わたしは再三きいているからである。違和感を覚えない日本人同業者もいるということである。あるいは単純な誤用で研究するに及ばずと考えるでもないのだろうか。

わたしは、その違和感の由来を突きとめたいと思いがながら数年を過ごしてきた。簡単なように思えるのだが、解け

たと思つたたとたんに例外がみつかることを繰り返してきた。解き難さの原因が複合動詞の数の多さと種類の複雑さにあると直感している。これ一語を処理すればすむという問題ではないのである。だが、母語に対する直感がおおむね正しいことは、己れの経験で知っているので、いつかは解けると思っていた。ここに披露するのは、灯台下暗しとでもいうべき考察の跡である。

なお、標題の「非文」は、現行の国語辞典に立項されていないが、言語学・日本語学界では、非文法的・不適格な文の意味で用いる習慣があるので、ここにも用いた。

## 一 可否の発言若干

「立ちあげる」についての発言にはどんなものがあつただろうか。

早かつたのは高島俊男（1995）である。淡路阪神大震災の朝日新聞の記事などにみえる「立ち上げる」をとりあげ、自動詞「立つ」と他動詞「上げる」のくつつく道理がないと明快である。作った人は「よほどことばに鈍感な人にちがいない」といい、それを使う人も「同程度の人である

う」と切りすて、ある高校教師の『立ち上げる』教育を』と題する本の「立ち上げる」「立ち上がり」を批判した。高島氏が否定する根拠は、この語が「よじれている」「分裂している」ことにある。自動詞に他動詞の続いた形はおかしいというのである。明快であるだけに、反証が示されたときは弱いだらう。

国立国語研究所(2000)にのった問答がある。「コンピュータが立ち上がる」という言い方を聞いた。コンピュータに詳しい人が言うようだ。このように特定の分野の新しい言い方にはどんなものがあるか、という問いである。その回答の要点を抄出する。

コンピュータ技術は初めアメリカで開発されたため、用語はほとんど英語に由来する。

パソコン用語は技術革新が速く、英語をそのまま片仮名に置き換えたものが多い。

中には「立ち上がる」のように日常的な日本語が専門的な意味で使われることもある。

「コンピュータを立ち上げる」と他動詞の形もある。

「プロジェクトを立ち上げる」「会社を立ち上げる」

「事業を立ち上げる」のように使うのも同じ用法と

言える。

片仮名語で表される専門用語と違って、やや俗っぽい印象を受ける。「立ち上がる」も「起動する」のほうが一般的だらう。

文化庁が国立国語研究所に実際に届いた質問らしいが、回答はこの語の出現の経緯をのべるだけで、「俗っぽい印象」とする以上の評価は下していない。「英語に由来する」とあるが、なぜ片仮名を用いなかっただのだらうか。「起動する」が一般的だらうというように、わたしの機械も、スイッチをいれると画面に「Windows」を起動しています」とでる。この「起動する」が駆逐された経過もしりたいものである。

金田一春彦(2002)の「なぜ『立ち上げる』になったの?」は啓蒙書での言及である。元来、自動詞「立ち上がる」に対して他動詞として用いたいときは、「母親が子供の手を取って、立ち上がらせた」のようにいった。たかがパソコンのスイッチをいれて動かしたぐらいで、「立つ」動きを大げさに偉そうに表現している気がする。日本人は他動詞よりも自動詞を好み、亭主への奥さんの言葉は、「風呂を沸かした」ならぬ「風呂が沸きました」である。

日本人はそうした遠慮深い精神の持ち主だったはずなので、「立ち上げる」は耳障りな感じがするのだ、と。この入らしい語用論的な説明である。

この語を擁護するのは産経新聞校閲部長の塩原経央氏である。塩原（2004）によると、『産経新聞』に断続的に載せた国語断想に「文語サイトを立ち上げたい」とかいいたところ、複数の読者から注意された。自動詞に他動詞をくつつけた怪しげな言葉は社会的に認知すべきではないという某大作家の発言が背景にある。それでも借用語である外来語よりはましである。日本語では、「風が吹く／笛を吹く」「水かさが増す／エンジンの出力を増す」など、自動詞・他動詞の区別がさほどはつきりしていない。「飛び出す・上り詰める・持ちこたえる・付け込む…」など、自動詞・他動詞の複合した語が少なからずある。他動詞「する」には「仕上がる・仕上げる」、「持つ」にも「持ち上がる・持ち上げる」の両形がある。塩原氏は以上のように反論している。

同じ新聞人ながら対照的なのが讀賣新聞編集委員の橋本五郎氏で、「編集委員が読む」（2002.17朝刊）に「チヨー不愉快な「立ち上げる」をかいている。若者だけでなく

大人も安手に多用する言葉の代表格で、政府は審議会を立ち上げ、政治家は政策研究グループを立ち上げ、若手実業家はベンチャー企業を立ち上げるといふ風に、最近は何んでも「立ち上げる」であるとのべ、その前年の十二月号の『思想』をみると、子安宣邦氏ら三氏の座談会記録二十三ページに、「立ち上げる」が三十回以上現われる、と厳しい。

わたしは前稿（2005）の末尾に次のようにかいた。

平安時代、下二段動詞「たつ」が自動詞に接尾した複合動詞は見えない。これは自動詞と他動詞の複合を避ける傾向がある日本語の文法体系の制約によるのだろう。

わたしは、近年猖獗を極める「立ちあげる」に強い違和感を覚える。

ここに示した原因の推測は高島俊男氏、某大作家と同じである。同様に直感した日本人も少なくないだろう。その直感の由来を考えることが本稿の目的である。

## 二 考察の方法

考察に資すべき研究の数は膨大である。斎藤倫明・石井正彦(1997)の「日本語語構成研究文献一覧」にあがっている六百篇近い論文のうち、標題に「複合動詞」の文字のみえるものだけでも一割はある。その全部につきあうことはできないが、同書の研究史の記述などに学びながら、解決への見通しをつけたいと思う。

本稿で考察対象とする複合動詞は 動詞連用形+動詞のものに限る。この複合動詞の構造を考えるには前後項の関係を形式化すると便利である。早くなされた寺村秀夫(1969)は、動詞の自立語としての意味を保持するか否かによって四分した。だが、意味の保持性の基準が明らかでないとして、動詞の格支配に着眼して整理しなおしたのが山本清隆(1983)の四類である。今はそれによることにして、格支配する動詞を大文字のV、しからざる動詞を小文字のvで表記し、前後項にそれぞれ小字の1・2をつけるのは、私にとった措置である。複合動詞による例文、つけて動詞を前後項にわけた文を矢印の下にあげ、非文にア

ステリスク(\*)をつけ、他の例語を括弧書きする。

類 V<sub>1</sub> + V<sub>2</sub>

前後項動詞ともに、複合動詞文中の名詞に対して格支配関係をもつ。

子供が泣き叫ぶ↓子供が泣く 子供が叫ぶ  
(降り積もる 光り輝く 刺し通す 売り歩く)

類 V<sub>1</sub> + V<sub>2</sub>

前項動詞だけが複合動詞文中の名詞に対する格支配関係をもつ。

則子が本を読み始める↓則子が本を読む \*則子が本を始める

(静まり返る 降り出す 走り過ぎる 書き終える)

類 V<sub>1</sub> + V<sub>2</sub>

後項動詞だけが複合動詞文中の名詞に対する格支配関係をもつ。

運転手が事故を引き起こす↓\*運転手が事故を引く 運転手が事故を起こす

(打ち重なる 取り澄ます 振り仰ぐ 差し迫る)  
類 V<sub>1</sub> + V<sub>2</sub>

前後項動詞ともに、複合動詞文中の名詞に対して格支配関係をもたない。

山田君が失敗を繰り返す→\*山田君が失敗を繰り返す  
\*山田君が失敗を返す

(取り締まる 打ち解ける 取り乱す 引き立つ)

この分類に若干の剰余のことは姫野昌子(1999)の指摘したとおりである。それを補うものとして、生成文法のたちばから派生過程に着目して分類した、影山太郎(1993)の「語彙的複合動詞」「統語的複合動詞」がある。これは四分類と完全に対応するわけではないし、当面の対象について考えるには、山本氏の四分類が便利である。

近年、複合動詞の説明が日本語の統語論にとつて極めて重要であることが認識され、さまざまな試みがなされてきた。従来の研究者は、分類はするけれども、それぞれに命名することには熱心でなかった。右に挙げた類ないし類の名称は実質を喚起せしめない。

山中桂一(1998)の分類基準も格支配であるが、複合の結果として前項動詞の格支配がわかるか否かによって二分した。典型的な型として「が咲く+を始める」が咲き始める」の類を「拡張動詞」、「を建てる+が込む」が建て込

む」の類を「複合動詞」と名づけた。そして後項の同じものを対比させた表を掲げている。その表の十組から六組を掲げる。

拡張動詞

複合動詞

が降り始める

……

を書き上げる

を持ち上げる

と思いだす

を想い出す

を使い込む

が建て込む

が走り回る

に立ち回る

……

を生き抜く

前項が格支配するとは、後項が動詞の自立的な意味を保持しないことで、これは山本氏の類 V1 + v2 に相当するそれを「拡張動詞」とよぶのは適切な命名だが、他の類にはふみこんでいない。本稿は分類を旨とするものではないので、これ以上は言及しないが、山中氏が続けて左記のうにかいて注目に値する。

先行要素が助詞を支配しないことから、たとえば「家が建て込む」「パソコンを立ち上げる」「同じクラスを持ち上がる」のように、部分的に見ると前項と後項とで食い違いをおこすことも間々生じる。

「立ち上げる」における前後項の食い違いを指摘した発言が登場したのである。これはのちに論ずることにして、次章では「あがる」による複合動詞全般をみることにする。

### 三 「あがる」による複合

複合動詞研究における近年の最大の成果は姫野昌子(1989)である。

姫野氏は、初めの二章で複合動詞にかんする総論的な記述を行い、第三章以下に「あがる」「あげる」など、後項に立つ主要な三十二語について各論を展開した。巻末の「複合動詞リスト」には、その後項動詞三十二による複合動詞二千三百七十五を掲げている。ほかに、本文でとりあげたのにリストから漏れたとわたしが判断する、「巻きたてる」など十四語がある。偶然だが、各論の最初が「あがる・あげる」である。わたしはこの研究にそって考えてゆく。なお、本稿では姫野氏の記述をひくことが多いので、以下の記述で、他者の論著以外の表記には、姫野氏の仮名書き「あがる」「あげる」を用いる。

本節では、姫野氏がとりあげた 動詞+あがる 型の複

合動詞に、仮にA型・B型、甲・乙などの符号をつけ、三語を限度に語例をそえる。一覧表でも三語が限度だからである。二語以下のばあいには、それしか見いだせないことを意味する。型の下のブラケット「」内は意味特徴、自・他は自動詞・他動詞の略称、いずれも姫野氏の呼称である。意味特徴はここにあげた五つのほかに、それぞれの内部でさらに細分することもしている。その第二次分類の意味は括弧「」に、第三次分類の意味は亀甲「」に記す。特に注意する必要ありと判断したものの肩にアステリスクをつけて後に言及する。

#### A型「上昇」

甲	自+あがる=自	駆けあがる	伸びあがる
		飛びあがる	
乙*	他+あがる=自	押しあがる	持ちあがる
		つるしあがる	

#### B型「完了・完成」

甲	自+あがる=自	できあがる	晴れあがる
		干あがる	
乙	他+あがる=自	織りあがる	組みあがる
		炊きあがる	

# C型「強調」

自 + あがる = 自 震えあがる おびえあがる  
のぼせあがる

# D型「増長」

他 + あがる = 自 つけあがる 思いあがる

# E型「尊敬語」

他 + あがる = 他 召しあがる

一見して明らかのように、E型を除く四つの型の複合動詞は自動詞である。後項が自動詞「あがる」なのだから当然かもしれないが、E型だけが他動詞になるのはなぜだろう。B・C・D型は、後項の意味が形式化した  $V_1 + V_2$  で、山本氏の類、山中氏の拡張動詞にあたる。B型乙とD型とは、前項に他動詞をとりながら、後項の自動詞によって複合自動詞になったのだろうが、そのしくみについてはあとで考える。

E型の「召しあがる」について、姫野氏は他動詞になる唯一の例外とするだけで、詳しい言及はしていない。だが、これを一つの型とするのは無理ではなからうか。この尊敬動詞は、「見る」から派生した食する意の古代語「召す」と、室町時代にみえて同じく食する意の尊敬動詞「あが

る」とが複合した語である。換言すると、前後項ともに他動詞として用いられて中世に複合した語である。したがって、現代日本語の複合動詞形成の考察には用いにくいのではないか。そこでE型をこの形式から除くと、残る四つの型はすべて 自動詞/他動詞 + あがる = 自動詞 の複合動詞ということになる。

A型に戻ると、これは 類  $V_1 + V_2$  構造。前後項ともに格を支配して「上昇」の意味特徴を有し、「あがる」は動詞本来の語義を保っている。前項が自動詞のばあい、甲の「伸びあがる」のように自動詞として機能するのは自然なありかたである。それに対して乙はいかに考えたらよいだろうか。

姫野氏は「上昇」の意味特徴を「全体的上昇」と「部分的上昇」に二分し、さらに前者を、「空間的上昇」(「序列の上昇」(「地位の上昇」に細分した。「序列の上昇」所属語は「繰りあがる」だけで乙 他 + あがる = 自、「地位の上昇」所属語は「のしあがる、なりあがる、勝ちあがる」の三語で甲 自 + あがる = 自 に相当する。そして「空間的上昇」所属語数は二十である。姫野氏はこれについて「浮きあがる」「はいあがる」を例に若干の語を費やしたが、と



もに前項に自動詞をとる甲のほうである。わたしはむしろ、乙の「つるしあがる・突きあがる・持ちあがる・打ちあがる・押しあがる・漕ぎあがる」が気になる。これらの複合がいかにして成立し、いかなる動作・作用を意味するのか。「押しあがる」は、例えば坂の上まで自転車を押してゆくさまでも表現するのだろうか。「持ちあがる」が「前年度の学級を持ちあがった」などの用法を含意するのだとしたら、これは空間的上昇とはいえない。「打ちあがる」「漕ぎあがる」「つるしあがる」などは、文脈がなくてはいかなる状況かわからない。用例を集めるにあたって、姫野氏は客観的な態度を通そうとした節がある。用例に疑問を感じても、努めて主観的な判断を下さなかったのではあるまいか。その結果、それが日本語として不適と疑われるものもリストにのつたようにみえる。例えば「部分的上昇」の甲の「たてあがる」「締めあがる」である。このくだりでは、日本語教育を専門としたこの人らしく、外国人学習者の「乗りあがる」「飛んであがる」の誤用を指摘している。日本人とても誤用することがあるので、母語話者の使用だからと全部とってはいは、適切な分析、精確な結論には至れないだろう。後に言及している語もあるが、誤用とおぼ

しいものは除外すべきだとわたしは思つ。

複合動詞の構造に関心のある人なら、だれしも特異な用例が意外にあることに気づいているに違いない。國廣哲彌(1983)には、現代作家の「しほり出てきたクリーム」「鉢が：吊り下って」がみえる。わたしの手元のカードにも、「吊り下がる」「甘えてこすりつく」「浮かび上げる」「殴り死なす」「焼き締まる」「断ち割れる」「政党が干し上がる」などがあるが、わたしはこれらを適格な日本語の用例としない。

とまれ、A型乙 他+あがる≡自 の語例には、B型乙からの類推により、あるいは次節のA型乙 他+あげる≡他 の対応形として派生した、臨時の造語が多く含まれる蓋然性が高い。このたぐいは慎重に扱わなくてはならない。いずれにせよ、「あがる」による複合動詞は、E型を右にのべた理由で除くと、自動詞として実現したことになる。

#### 四 「あげる」による複合

本節では 動詞+あげる 形式の複合動詞について前節と同じように考察する。

A型「上昇」	
甲 自＋あげる＝他	* 切れあげる 乗りあげる
乙 他＋あげる＝他	打ちあげる 運びあげる
	なであげる
B型「下位者から上位者に、上位者から下位者に対する社会的行為」	
他＋あげる＝他	申しあげる 買いあげる
	召しあげる
C型「体内の上昇」	
甲 自＋あげる＝自	むせびあげる せぐりあげる
	こみあげる
乙 他＋あげる＝他	すすりあげる（感情が）
	突きあげる
D型「完了・完成」	
他＋あげる＝自*	焼きあげる 仕あげる
	こねあげる
E型「強調」	
他＋あげる＝他	ほめあげる 縛りあげる
	どなりあげる
F型「その他」	

他＋あげる＝他 本を読みあげる 軍隊を引  
きあげる 人生を歌いあげる  
私見では、この形式は一覧表にも記述本文にも問題が多い。

まずA型甲 自＋あげる＝他。意味特徴「上昇」の（部分的上昇）の下位分類（量の減少による形の縮小）の複合動詞に、「切れあげる」がみえるが、実例はあげていない。断定はできないが、これはいかにも不自然な日本語である。かりに実例があつたにしても、前節にのべたように誤用として処理すべきではないか。

A型として姫野氏があげた複合動詞は七十一語に上る。（部分的上昇）の下位分類（形の伸長）の にあげた六語のうち、「重ねあげる・積みあげる・盛りあげる」の類として、説明文中に「やや特殊で」とした「乗りあげる」がある。用例は「船が（船体を）暗礁にノ車が（車輪を）歩道に乗りあげる」である。これについてわたしは別の解釈をもっている。「乗る」を前項にもつ複合動詞は、「乗り入れる・乗り出す・乗り着ける・乗り慣らす・乗り回す」など、いずれも「乗る」を自動詞として処理することはたまたわられる。これらは現代語の複合動詞とすべきではなく、

前代までに成立したと解釈すべきではないか。『古今著聞集』に「雲分といふあがり馬を乗られけるに」、『日葡辞書』に「ヨウ船ヲ乗ル人」の用例がある。これからわかるように、単に乗り物にのるだけのばあいと、自ら乗り物を操るばあいとで格支配が異なったのである。先にあげた「乗る」を前項とする複合動詞は一樣に、自ら操作する意の表現である。つまり、この「乗る」は他動詞と解釈してよいのである。「切れあげる」「乗りあげる」をこのように処理すると、A型から甲 自+あげる≡他 がきえる。

C型は、一覧表には、前項動詞の自他によって二分し、例文「子供がしゃくりあげる」だけをあげる。記述本文には「むせびあげる・しゃくりあげる・せぐりあげる・すすりあげる・咳きあげる・こみあげる・（感情が）突きあげる」の七語がみえる。右には、その七語のうち、「すすりあげる・突きあげる」だけを乙と判断し、その他の五語を甲としたのだが、著者の意図にそっているだろうか。語構造だけからいうと、乙は 他+あげる≡他 で問題はないだが、C型において甲は、後項に他動詞「あげる」をとりながら自動詞にとどまった特異な複合動詞である。著者がその意味特徴を「体内の上昇」とし、「人の生理作用や心

理現象を表すものであって、この場合の「あげる」は、無意志動詞になる。」と書いているように、話し手の身体内で完結する動き、話し手の内部感覚を表現する特殊なありかたが関与しているのだろう。乙の「（感情が）突きあげる」は、完全に話し手の内部で完結し、他者の知覚しえない事象である。話し手が、自身の体内あるいは意識内である力が作用すると感ずるゆえに他動詞で表現するのはあまるまいか。

日本語の内部感覚の表現を考えるには特に注意が必要である。「水が飲みたい」のように対象を主格で表現し、「吐き気がする」「傷がつく」「胸が痛む」のように、動的な動詞でも現在形で発話時点の状態を表現することなどを考えあわせるべきである。とまれ、姫野氏自身、このくだりを「このあたりの、理屈どおりにはいかなないのが複合動詞の難しいところであるう。」と結ばざるをえない特殊な現象なのである。

D型・E型は、「あがる」のB・C型に対応し、後項の意味が形式化した、山本氏の類  $V_1 + V_2$ 、山中氏の拡張動詞に属する。そのD型を著者は 他+あげる≡自としたが、「あげる」は他動詞なので、これは 他+あげる

「他」の誤植であろう。また、E型の語例に「どなりあげる」がある。かりに用例を拾ったにしても、一過性の動作「どなる」に「あげる」をつけるのは普通の表現とはいえず、「どなりつける」が自然なので、先の「切れあげる」と同じように特異な使用として除くべきだとわたしは考える。

F型は 類  $v_1 + v_2$  と解する。右の四語のほかに「(声を)張りあげる・(仕事を)切りあげる・(大阪からノをノへ)引きあげる・入れあげる」が、著者の挙げた全部である。これは連語による特殊な意味に限定されたものであるが、構造自体は 他 + あげる = 他 で特に問題にすることはない。

以上の検討と修正によって、「あげる」を後項とする複合動詞は、話し手の内部感覚を表わすC型甲を特別な表現とすると、そのほかは 他 + あげる = 他 構造に収まる。すると、本稿の対象である「立ちあげる」は 自 + あげる = 他 構造で、内部感覚の表現でもないので、この六類型からはみだしていることになる。

複合動詞の前項が自他の対応形をもちながら、複合動詞の自動詞形と他動詞形において、前項がいずれかのままで

ある語がみられる。それは、複合動詞が一語化していることを示すと説明される。これを論じた須賀一好(1984)に、自 + あげる 構造と同じ 自 + 他 構造の複合動詞「落ちこぼす」にかんする次の言及がある。

「落ちこぼす」を単なる結合とみるならば、「生徒を落ちこぼす」は、「生徒を落ちて、こぼす」ということになり、論理的にはおかしい表現だということになるう。

「立ちあげる」と同じ構造の語が二十年前に教育界の報道で用いられていたのである。

## 五 非文説の根拠

姫野氏の著書によって、複合動詞は他動詞だけが自動詞だけの結合の圧倒的に多いことがしられ、それは日本語を母語とする人なら一様に納得できるだろう。影山太郎(1993)はそのことを多くの言語に通ずる性質だとしてうえで、さらに性格性の視点から自動詞を二分した。工藤の前稿(2005)に掲げたものを再びひく。

意図的行為を表す……非能格自動詞(働く、さわぐ、

起きる等)

非意図的行為を表す……非対格自動詞(こころぶ、生じる、浮かぶ等)

いうまでもないことだが、動作主(Agent)を主語にとるのが非能格自動詞すなわち意志の自動詞、意図をもたず受動的に事象に関わる対象(Theme)を主語にとるのが非対格自動詞すなわち非意志の自動詞である。

さて、第一節で国立国語研究所の説明にみたように、「立ちあげる」は「コンピューターが「立ちあがる」に始まり、のちに他動詞を作りだしたらしい。スイッチをいれると機械が動きだすことではテレビや旋盤とかわらない。特に、テレビはひとりで映像が映って音声がでるのだから、コンピューターよりも立ちあがる印象が強い。だが、この動きを日本人は「立ちあがる」とは表現せず、「映る」というだけであった。複合動詞「立ちあがる」の従来の用例は、ほとんど有生主語による意志の自動詞としてである。「波が高く立ちあがる」ともいうが、これは擬人法にほかならない。コンピューターを自分の仲間のように思った技術者たちは、意図的行為を表わす「立ちあがる」を良しとしたのかもしれない。それを他動詞にかえた表現も可能だ

と考えて、やがて「コンピューターを立ちあげる」を使つたのだろうか。

一般的な問題として、意図的行為を表わす 非能格自動詞+あがる の後項を「あげる」にかえた複合動詞が派生しうるか否かを考えてみる。

1 病人がそーつと起きあがる。

a 看護婦は病人をそーつと起きあがる。

b 看護婦は病人をそーつと起きあがらせる。

まともな日本語感覚をもつ人なら、aを非文、bを適格文と判断するに違いない。日本語文で一番の優位に立つ補語は主格である。aの文で、一語化した複合動詞「起きあげる」に主格補語「看護婦」が関係しうるとしたら、それは「あげる」だけである。一方、「起きる」のは「病人」であるが、対格補語の「病人を」は「起き」と関係しえない。適格文にするには、「起きあがる」に使役辞「せる」のついた形にせざるをえないのである。

2 救助成功の報に家族は躍りあがった。

a 救助成功の報が家族を躍りあげた。

b 救助成功の報が家族を躍りあがらせた。

3 大喚声に後列の少女が伸びあがった。

a 大喚声が後列の少女を伸びあげた。  
b 大喚声が後列の少女を伸びあげらせた。  
2・3も同様に、複合動詞の使役態であるbの表現がなされる。自動詞+あがるの複合動詞は、使役辞「せる」をえて初めて対格が支配できるからである。第一節にひいた金田一氏の「母親が子供の手を取って立ち上がらせた」はこのことをさしたのである。

当然、「あがる」以外の意志自動詞においても同様である。

- 4 不況で父は堅実な経営に踏みとどまった。  
a 不況は父を堅実な経営に踏みとどめた。  
b 不況は父を堅実な経営に踏みとどまらせた。  
5 兜虫に少年たちが群れ集まった。  
a 兜虫が少年たちを群れ集めた。  
b 兜虫が少年たちを群れ集まらせた。  
「立ちあがる」に同じ操作を施すとどうなるだろうか。  
6 水源の枯渇に農民が立ちあがった。  
a 水源の枯渇が農民を立ちあげた。  
b 水源の枯渇が農民を立ちあがらせた。  
7 コンピューターが立ちあがる。

a 青年がコンピューターを立ちあげる。  
b 青年がコンピューターを立ちあがらせる。  
6において、意志動詞「立ちあがる」の使役態によるbは自然な日本語だが、それを他動詞に変えたaは非文だ、とわたしは判断するのである。先に、「コンピューターが立ちあがる」は擬人法として生じたかとのべた。詩的な擬人法として許される「波が高く立ちあがった」は自然現象なので、これに他動詞化を施した「波を高く立ちあがらせた」は成り立たず、7bと比べるわけにはゆかない。どのみち、無生の対象「コンピューター」ゆえ、bの許容度は低い。

前項がほかの動詞による「あげる」との複合も同様である。

- 8 沈没船が浮かびあがった。  
a 沈没船を浮かびあげた。  
b 沈没船を浮かびあげらせた。  
後項が「あがる」以外の動詞による複合で、無生主語のばあいに変換によって派生する他動詞文をみよう。  
9 試薬が検体からにじみでる。  
a 試薬を検体からにじみだす。

b 試薬を検体からにじみださせる。

10 絵の具が少しずつ染みこんだ。

a 絵の具を少しずつ染みこめた。

b 絵の具を少しずつ染みこませた。

9・10のaの許容しがたいことにはわりはない。

右には複合自動詞から派生した、「あげる」による複合他動詞について考えたが、これは方向をかえて、他動詞から自動詞を派生させても同じことである。

11 刑事は賊を追いあげた。

\* 賊は刑事に追いあげた。

12 少年がボールを投げあげた。

\* 少年が投げあげたボール。

13 少女は水を汲みあげて飲んだ。

\* 少女は汲みあげた水を飲んだ。

いずれも日本語話者としては許容できないものである。

以上によって、姫野氏の分類による、A型甲 自+あげる≡他「上昇」の複合自動詞は、やはり日本語として不自然な形式であることが明らかである。

右の事実を貫く原理は、前後項の動詞の意味に関わるだろう。姫野氏の著書の第十二章に、先学の研究の要約「前

項・後項動詞の意味関係」がある。それを簡略に示す。

一 複合動詞は一つの主語、一つの目的語で構成される単一の事象を表わす。

二 二つの動詞は、その行為・作用の時間的前後関係を表わすばあいが多い。

三 類似概念並列のばあい、前項には初発の状態や弱度の状態を表わす動詞、後項には進展・終局の状態や強度の状態を表わす動詞がくる。

四 前項には動きを表わす動詞、後項には結果を表わす動詞のくることが多い。

例えば、「学長が委員会を立ちあげる」において、「立つ」のは委員会、「あげる」のは学長である。「立ちあげる」は二つの事象を一語で表現するので、右の二に反すること明らかで、第四節にひいた「落ちこぼす」と同じく非文なのである。

## 六 残る問題

以上の検討をふまえて、第一節に紹介した塩原氏の主張など、残る問題を検討する。

自動詞に他動詞が接したことにについて高島氏は、「よじれている・分裂している」と拒否し、塩原氏の使用を批判した某大作家も同様であった。それは、この複合語に違和感を抱く多くの日本人の直感であるに違いない。だが、これと同構造とみえる複合動詞が他にもあるので、声高に反論されなかったのだろう。橋本五郎氏がこれを拒否し、国立国語研究所の回答がこれを俗語としたのも同じかと思うが、ともに詳しい根拠は述べられていない。

外来語よりもまだ、とこれを弁護したのが塩原氏で、その根拠は次の三点であった。

日本語では、「吹く・増す」などにみるように自他の区別がはつきりしない。

「飛び出す・上り詰める・泣き暮らす」など自動詞に他動詞のついた語がある。

他動詞「する」には「仕上がる・仕上げる」、「持つ」には「持ち上がる・持ち上げる」の両形がある。

塩原氏のいうとおりだが、「増す」のような自他同形の動詞はごく少数なので、反論の材料としてはかえって弱い。もう一つの例にあげた「風が吹く」については、天然現象という動詞の特異性を説明した木下正俊(1972)に学

ぶべきである。すなわち、「寄せては返す波」のような他動詞による表現を、わたしたちが当然のこととするのは民族の長い伝統であった。ほかに古代語の「露結ぶ」「霜置く」「雪積む」「夜明く」「地震る<sup>なみふる</sup>」もそうである。古代の人々は、これらの現象の背後に大きな神格の存在を考えていた時期があるのだろう、というのである。「雨降る」は自動詞の表現とみえるが、木下氏は他言語の非人称表現などを手がかりに、他動詞による「雨振る」であつた蓋然性をのべている。かくして、塩原氏の根拠の弱さは明らかである。

の複合動詞のうち、「仕上がる・仕上げる」は、姫野氏の分類で「完了・完成」の意味特徴を表わし、「あがる」はB型、「あがる」はD型であつて、特異な構造というものではない。「持ち上がる」は恐らく「困難な問題が持ち上がった」などの用例を含意するのだろうが、前後項ともに格支配力を失つて熟合した、山本氏の類に相当する。よつて、これは反論の根拠には使えない。

残るはの十六語である。姫野氏の「あがる・あげる」を参考にして考えると、「あがる」の複合動詞からE型の尊敬語「召しあがる」を除く六項のうち、他+自=自



構造の複合動詞が半数の三項ある。一方、「 $\sim$ あげる」の複合動詞で 自+他 $\parallel$ 他 構造のものは、わたしの修正後の七項のうち、意味特徴「体内の上昇」のC型甲の一項（「こみあげる」など）だけである。すなわち、他+自構造の複合動詞は意外に多いが、自+他構造の複合動詞はごく少ないのである。この事実が日本人の言語意識にあつて、「立ちあげる」への違和感になつたのだらう。

この十六の複合動詞のうち、前後項ともに格支配関係をもつ、山本氏の類に属する「泣き暮らす・引き下がる・通い続ける」の三語は自然な語彙的複合動詞である。次いで、後項が格支配しない類、山中氏の拡張動詞に属する「飛び出す・上り詰める・抜き去る・立ち通す・咲き始める・死にかける・振り返る・引きつる・持ちこたえる」の九語も除くべきである。次に、「食い違ふ・取り散らかる・懸け離れる・付け込む」は 他+自 構造であるつえに、前項は本来の意味を失つて接頭辞に転じているので、自+他 構造「立ちあげる」の議論には有効でない。

かくして塩原氏の「立ちあげる」援護論は成りたちがいのである。

## 七 他+自 構造の解釈

他+自 構造の複合動詞が意外に多く目につく事実がある。

姫野氏の「複合動詞リスト」には「 $\sim$ あがる」が八十三「 $\sim$ あげる」が百五十二ある。「 $\sim$ あがる」の多くは統語的複合動詞のB型乙の「組みあがる・炊きあがる・縫いあがる」などだが、語彙的複合動詞のA型乙も「繰りあがる・巻きあがる・盛りあがる」などとある。ほかにそらで探しても、「当てはまる・入れかわる・思いあたる・思いつく・切りかわる・繰りさがる・積みかさなる・取りしまる・煮つまる・ねじまがる・貼りつく・焼きつく」などがすぐにうかぶ。

姫野氏のリストから、「あげる・あがる」のように自他動詞が等しい拍数で対応し、他動詞を前項にもつ複合動詞があるものを調べた結果を示す。括弧内には、掲出語数を分母に、前項が他動詞のものを分子にして掲げる。

～おりる (16)・～おろす (28/28)

～かかる (6/38)・～かける (48/48)

く・くだる (1/7)・く・くだす (5/5)  
さ・さがる (4/10)・さ・さげる (11/11)  
さ・さる (7/58)・さ・さす (105/105)

こうして見ると、他+自 構造の複合動詞の意外な多さがよくわかる。自+他 構造の「立ちあげる」のように稀少でないのである。

右のうち若干のものについて言及する。「く・おる」の複合動詞は「かかえおる」だけで、状態や付帯状況を意味するものである。「く・かかる」の複合動詞に「始動」を表わすものは除かれている。前項は「おそい・きり・せめ・つかみ・つき・なぐり」の六語である。ほかに判断を保留した「うち・おし」もある。この形の複合動詞は、「敵を攻める」が「敵に攻めかかる」となるように、動作対象がヲ格からニ格に変わる。「く・くだる」の複合動詞は、状態を示す「せめくだる」だけである。「く・さがる」の複合動詞の前項は「く・くり・つり・ひき」で、「く・いさがる」では分割できないほどに熟合しており、「く・くりさがる・つりさがる」では後項の結果をもたらす先行動作を表わし、「ひきさがる」では状態を表わすといえよう。「く・でる」の複合動詞の前項は「うつたえ・こぎ・ささげ・つ

き・とどけ・ねがい・もうし」で、こちらは当初から対象にヲ格をとるもの、ニ格をとるもの、動作の状態を意味するものとさまざまである。

この構造の複合動詞の用例の初出を『日本国語大辞典』第二版で調べると、明治期が圧倒的な多数を占める。「切り替わる」に至っては、埴谷雄高の『観念の自己増殖』(1952)である。近代日本語において活発に作られたものらしい。

これについて、西尾寅弥(1982)に、「あてはめる あてはまる」「切り替える 切り替わる」「入れかえる 入れかわる」等を論じて、「他動詞が自動化した結果としてできる、自動詞のまえ要素は他動性の形のまま残るものが多い。」「これらが二語の連合ではなく、一個の複合動詞である以上、別に異とすることではない」とした。他+自 構造の複合動詞は他動詞を後項とする複合動詞から派生したと解釈するものである。だが、なぜか 自+他 構造の複合動詞については言及しない。

自+他 構造の複合動詞には違和感をおぼえて扱われていると拒否するのに、他+自 構造のそれがおおむね受容できるのはなぜだろうか。その答えはわりに簡単に見つ

かりそうである。「主催者が日程を繰りあげる」という文において、動詞「繰りあげる」は主格・対格の補語を取るすなわち二価動詞である。これから派生した「日程が繰りあがる」では、他動詞文に主格としてあった「主催者」が消え、「繰りあがる」は対格を要しない一価動詞にかわる。日本語では上位成分よりも下位成分が圧倒的に優勢なことは接辞をみればわかる。すなわち、動詞の文法的な性質が接尾辞によってきまる一方で、複合動詞の前項は接頭辞に転じやすいのである。主格語「日程が」をつける述語において、比重は後項の自動詞が大きい。つまり、話し手には前項が強く意識されないのである。それは、やがて前項が接頭辞に転ずることを意味する。他+自 構造の複合が広がる道理である。この構造の複合動詞の成立には、「しあがる・できあがる」「ひあがる・ほしあがる」のように、「あがる」が「完了・完成・強調」の意で自動詞にも他動詞にもついて、活発に統語的複合動詞を形成することが深く関与していること、いうまでもない。「コンピュータを立ちあげる」において、コンピュータは「上げ」られるものではなく、「たつ」ものであることも忘れてはなるまい。

右の事情のほかに、いま一つの条件も加わっている、とわたしは考える。第二節で山中氏の拡張動詞の説をみたとき、先行要素が助詞を支配しないことについての説明も引いておいた。右の記述に関連づけていうと、「繰りあがる」はすでに一語化して、「繰る」は格支配しないということである。山中氏は続けて次のように書いていた。

「申しつかる」「仰せつかる」は明らかに「申し+つかる」「仰せ+つかる」として分析されるべき動詞であるが、「つける」に対応するはずの「つかる」という語形は単独には存在しないので、「申しつける」「仰せつける」という複合動詞を基幹として、そこから自動詞が導かれたと想定するほかはない。

これは重大な指摘である。「申しつける」「仰せつける」に対応する自動詞はないので、文法の定石では、受動態の接辞をもつ「申しつけられる」「仰せつけられる」となるはずである。むしろ、規則どおりの語形も行われるが、日常生活では破格というべき「申しつかる」「仰せつかる」が用いられる。そこにはたらいいたのは簡略化の志向だろう。右の例でいうと、正統の八拍語よりも破格の六拍語をとった民族の心理である。

その淵源はたいそう古いとわたしはみている。単純動詞

にも生じていたからである。漢字「囚」の所動詞（受動態）の訓を問われたら、多くの人は「とらわれる」と答えるだろう。だが、正答は「とらえられる」である。「報」の所動詞の訓も、「むくいられる」ならぬ「むくわれる」と答えるに違いない。前者の「囚」には、すでに熱田日本書紀の古訓に「とらはる」がみえ、色葉字類抄は「囚人」に「トラハレヒト」と付訓している。後者「報」の訓として辞書は、『古今著聞集』巻十二の四段活用例「つみをむくはんがために」も掲げる。所動詞「むくわれる」もかくしてうまれたのだろう。「教える」の自動詞「教わる」も同様の派生だろう。『日本国語大辞典』第二版の初出は洒落本『傾城買杓子定規』（1804）である。

古い切抜きであるが、新聞のテレビ番組欄で、映画『釣りバカ日誌6』の紹介記事に、「平社員の浜崎が社長に間違われ、社長の鈴木が運転手に間違えられたことから大騒動が展開」（毎日新聞1996.11.22朝刊）がある。こんな短い一文の中に本来の形と破格の派生形が共存する、校閲部の目からこぼれた興味ある例である。簡略化の志向は常に作用しているの、他動詞＋自動詞 構造の複合動詞はな

お次々に生まれるであろう。

近年、「花火／ロケットが打ち上がった」という報道によく接する。わたしはこれに違和感を覚えるが、もう珍しい表現ではないらしく、姫野・西尾・須賀氏のリストや論文にみえる。『日本国語大辞典』第二版が出典を示さず「花火が打ち上がる」の用例をあげるのは当代の用例という意味である。わたしは性急すぎる採録だと思うのだが。

## 八 翻訳と「立ちあげる」

コンピュータ用語はほとんど英語に由来するとして、「立ちあがる」より「起動する」が一般的だろうとする国立国語研究所の回答を第一節にひいた。この回答の意味するところを考えてみたい。

「起動」は、動く、動きはじめる意の古い漢語で、梁・昭明太子の「解二諦義」にみえるという。日本では室町時代に「たちいふるまい、起居」の意で用いられたらしい。『広辞苑』第二版に「動きを開始すること。始動。」とあるのは、もとの漢語の意味を伝えたものである。第五版では「コンピュータのシステムを稼働できる状態にする」と

あるだけだが、『新明解国語辞典』第五版ではそれを  
の語義にあげ、には一般化した用法「組織などを作り、活  
動をはじめ」と記述する。

コンピュータ用語「立ちあげる」の元になった英語は  
“startup” と “boot” なのさ。「X-MEDIA パンパン用語辞  
典」(<http://www.x-media.co.jp/jiten/>) にもある。特に  
Mac OS でシステムを起動するところを “startup” といふ  
し。そう説明されることなのに、何にゆえに「起動する」  
も「スタートアップ」もとらなかつたのか、わたしは遂に  
つきとめられなかつた。

昨年、三分冊で刊行された岩波文庫版『白鯨』はすでに  
名訳の評価が高い。訳者・八木敏雄氏からの惠贈の榮譽に  
浴したわたしもその名訳に酔うことができたが、その第百  
九章に突如「立ち上げる」が出現してわたしを慌てさせた。  
船倉に収めた樽から鯨油がもれているので、ひきあげて  
処理しなくてはならない。そのためにバートンと称する装  
置を動かす必要がある。一等航海士のスターバックがエイ  
ハブ船長にそう伝えるくだりと、以後の経過を語る章であ  
る。航海士と船長の対話、そして地の文に、つづつ三回み  
える。その訳文と、訳者が用いた底本、Northwestern New-

berry 版 (1988) の原文を添える。わたしのみた他の三本  
の原文もこの箇所には違はない。

1 「滑車を立ち上げて樽を蔵出しする必要があるいま  
す」

“We must up Burtons and break out.”

2 「わしは滑車の立ち上げはゆるさんぞ」

“I'll not have the Burtons hoisted.”

3 とまかく命令は履行され、滑車は立ち上げられた。  
However it was, his orders were executed; and  
the Burtons were hoisted.

なお、原文では、1 に対して船長が “Up Burtons and break  
out?” と鸚鵡返しにいうが、新訳は「滑車で蔵出したと」  
である。

解説によると、この新訳は日本語による十一番めの翻訳  
だという。1 について、近くにあつた四つの邦訳を、訳出  
順に A〜D の符号をつけて比べてみよう。

A 絞轆うねんを巻いて、船艙からださねばなりません

(阿部知二訳 河出世界文学全集)

B 絞轆を揚げて、船艙を開けにやなりません」(田

中西三郎訳 新潮文庫)

C バートン（轆轤<sup>ろくろ</sup>）に荷役を入れ、蔵出しにかからねばなりません」（坂下昇訳 国書刊行会「メルヴィル全集」）

D 軽滑車<sup>バートン</sup>を吊るして樽を出さねばなりません」（幾

野宏訳 集英社「世界の文学」）

新訳が「滑車を立ち上げる」とした三箇所を、Aは「絞轆を巻く」、Bは「絞轆を揚げる」の訳で通した。Cは2以下を「ケンカ巻きの荷揚げ」「バートンは揚げた」と訳した。Dは「軽滑車<sup>バートン</sup>を吊るさせ」「軽滑車<sup>バートン</sup>が揚げられた」とした。

当代の文学や翻訳に暗いわしには見当がつかないが、「立ちあげる」の使用は今や珍しくないことなのだろうか。

おわりに

コンピューター用語から始まった「立ちあげる」という新語は、一部の日本人には嫌悪されながらも、多くの日本人の用いることになった。その嫌悪感とは、これが日本語文法の原理にあわないことに由来する。複合動詞における自動詞+他動詞 構造は、日本語の歴史において決して

活発な造語方式ではなかった。それにもかかわらず、かくも急速に使用が広まったのは、コンピューターが、有史以来の人類が作ってきた機械とは、およそ異なる機能を有することに由来ののだろうか。

新語・新用法は、その誕生にたちあわなかった人には、新しいと意識されないばかりほとんどである。例えば「目線」である。これもテレビ界の用語が若者を通して広まったらしい。「視線」とかいてほしい箇所を「目線」とした学生の文章に朱をいれても、おおむねこちらの意図は通じない。これは辞書にも登録されて、すでに市民権を与えている。

少数の日本人が違和感をいだき、わたしが非文と判断する「立ちあげる」を、多くの日本人は受けいれている。もう定着したといっていいかもしれない。わたしがこの語に違和感をいだかなくなる日が、はたして訪れるだろうか。

#### 【文献】

影山太郎（1983）『文法と語形成』ひつじ書房

木下正俊（1972）「雨が降る」といふ言ひ方」（『萬葉集語法の研究』塙書房 初出『国文学』廿五号 関西大学（1959）

金田一春彦(2002)『日本語を反省してみませんか』(角川 ONE

テーマ21)

工藤力男(2005)『複合動詞論序説』とれたて・生まれたて

「『成城国文学』廿一号」成城国文学会

國廣哲彌(1983)『私の辞書論』(『日本語学』第二巻六号 明治書院)

国立国語研究所(2000) 新「ことば」シリーズ12 『言葉に關する問答集』

斎藤倫明・石井正彦編(1997) 日本語研究資料集 『語構成』

ひつじ書房

塩原経央(2004)『「国語」の時代』(ぎょうせい)

須賀一好(1984)『現代語における複合動詞の自・他の形式について』(『静岡女子大学研究紀要』十七号)

高島俊男(1995)『お言葉ですが…』(『週刊文春』十月十九日号)

寺村秀夫(1969)『活用語尾・助動詞・補助動詞とアスペクト その一』(『日本語・日本文化』一 大阪外国語大学研究留學生別科)

西尾寅弥(1982)『自動詞と他動詞 対応するものではないもの』(『日本語教育』四十七号 日本語教育学会)

姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房

山中桂一(1998)『日本語のかたち 対照言語学からのアプローチ

ローチ』東大出版会

山本清隆(1984)『複合語動詞の格支配』(『都大論究』六十二

号) 東京都立大学

# 「付記」

本稿をなすにあたって、岐阜大学教育学部の佐藤貴裕氏の教示を仰ぐことがあった。